

(2018年度)

国語

次の文章は、佐藤いつ子『駅伝ランナー』（角川文庫）の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

その日の学校の帰りの会するとき、先生から一枚のチラシが配られた。そのままランドセルに放りこもうとした手が、一瞬止まった。

『磯田区駅伝大会のお知らせ』

走哉の目は『駅伝』という文字に釘付けになった。

ヒロシが大声で康介を呼んだ。

「康介、今年も駅伝大会、いつしよにエントリーしようぜ」

「おう！ 今年こそ優勝ねらおう」

康介がかけよると、ヒロシは康介の肩に、おおいかぶさるように腕をまわした。

去年の駅伝大会で、強豪メンバーをそろえたヒロシや康介たち四人は、五年生の部で三位に入賞した。

学校の全体朝礼でも表彰されていた。朝礼台の上で、はにかみながら、でもほこらしげに賞状を受けとっていた、四人の姿が思い出された。

「去年のメンバーで出ようぜ！」

「よっしゃ、大樹とジュンも誘わなきゃ。大樹たち、まだ帰ってないよな」

ヒロシはそわそわして、後ろの出口からろう下に顔を出し、となりのクラスの様子をうかがっている。落ち着かない教室に、しびれを⑦キラした先生が声を上げた。

「駅伝大会は学校行事ではないから、出場する人は、保護者の方に直接申し込んでもらってください。日直さん、さよならのあいさつお願いします」

あいさつが終わると、ヒロシと康介は一番に教室を飛び出した。クラスの他の子たちがばらばら帰っていても、走哉はまだチラシをにぎりしめていた。

開催は十一月三十日。まだ一カ月以上ある。

六年生の駅伝は、一人二キロで四区間走ることになっている。

早朝のランニングでは、全部で二キロ半ほど走っている。今は途中で歩いているけど、これからもっと練習すれば、二キロならがんばれる気がする。

体じゅうの血が勢いよく流れだした。

「走哉、早く帰ろうよ」

いつもいつしよに帰っている陸が、チラシをのぞきこんだ。

「何、走哉。駅伝？」

走哉はパツと顔を上げた。

「ねえ陸、いつしよに出ない？」

陸がきよんとする。

「まさかあ。ぼくが超インドア派のゲーマーだって、走哉が一番よく知ってるじゃない。苦しい思いして走るなんて、信じられない。ありえましょーん」

陸はおどけて、首をすぼめてみせた。

「それに走哉だって、やっぱゲーマーでしょ」

毎朝走っていることを、陸には言っていない。走哉は口をつぐんで①あいまいに笑うと、チラシをランドセルにおしこんだ。

家に着いてから、自分の部屋でもう一度チラシをすみからすみまで熟読した。去年は④キヨウミがなかったから、多分母さんにもわたさずに捨てたんだと思う。

父さんに余計なものを見せて、むりやり出場させられるのが、いやだったのもある。でも、今年は……

②「出たい」とはつきり思うのが、怖いような気がした。それに、駅伝は一人では出られない。

ヒロシたちはもうチームを組んでいる。そもそも、あのチームに入るなんて、Aおそれおおい。でも、たのみの陸にはきっぱり断られてしまった。

走哉は、部屋にかかっているカレンダーを見つめた。

明日学校に行ったら、ほかでメンバーをあたってみよう。母さんに話すのは、それからいい。

エントリーの締め切りまでは、まだ日がある。走哉はチラシをきれいに折りたたんで、机のひきだしにしまった。

翌朝、学校に行くと、走哉は勇気をふりしぼって、何人かに声をかけてみた。でも、たいてい陸のような反応が来てきた。

「走哉がでるの？」

こんなセリフが続くと、ボディীবローをくらったみたいに、じわじわと痛みがきいてくる。

「だれが見つかった？」

陸が声をかけてきた。口もとが笑っている。

走哉がクラスの子たちを駅伝にさそっているのを、見ていたらしい。心配してくれているのか、㊦オモシロがつているのか見当がつかない。

答えるかわりに、首をななめにかたむけると、

「ふうん、そっか」

さらりと流された。

陸はいつもひょうひょうとしている。長い前髪を通してすけて見える目からは、どう思っているのか読みとれない。

走哉は、机の上に置きっぱなしだったランドセルをさかさまにして、教科書を取り出した。何冊かのノートが、勢いあまって床にすべり落ちた。

そのとき、かおりの声が教室にひびいた。

「駅伝出たい人、だれかいませんかー」

「女子も出るの？」

ヒロシが、話に食いついた。

「うん。三人は集まったんだけど、あと一人見つからなくて」

陸がふりかえって、余計なことを言った。

③「あつ、走哉が出たいって」

「お、おい。陸」

「えっ？ 走哉が？」

また、同じ反応だ。しかも、かおりから。

あつという間に、耳まで真っ赤になった。

「わたしたち、一応女子だけのチームを作ろうと思っていて……」

かおりがB上目づかいで、申し訳なさそうに言った。

走哉はとんでもないという風に、両手を振った。

「いやいや、分かっているよ。陸が勝手に言っただけ。ほんとにそんなに出不たくないし。おれ、マジ遅いし」

やさしいかおりは、ホッとしたみたいにほおをゆるめた。かおりのこと、ちよつと気に入っていただけに、とどめをさされた思いだ。

目線が床に急㊧コウカする。

バツが悪そうに陸が離れて行った。床に㊨チらばっていたノートを拾いあげ、いすに座りかけたとき、耳元で小声がした。

「走哉、駅伝大会のエントリーのことなんだけど」

飛びはねるようにして振りかえると、康介の顔が㊩マヂカにあった。

「えっ！ だって康介はヒロシたちと、去年のメンバーで出るんじゃないの？」

「うん、そうなんだけど……」

「じゃあ、なに？」

「実はおれ、サッカーで右足ねんざしてから、足の調子よくなくて」

康介がうつむき加減になった。

「それっていつ？」

「ねんざしたのは、夏休みの終わりごろかな」

「でも、運動会も出てたし、体育もやってるよね？」

「いや、ふつうに運動は出来るんだけど。サッカーやっていると、まだ時々痛むときがあつてさ。医者からは様子見てやるように言われてるんだ」

「今でも？」

「うーん、ひどくはないけど、同じところくり返しちゃうみたいで……。駅伝、ヒロシあいつマジだから。もちろんおれだって、そうなんだけど」

④リレーのときのヒロシの完ぺきな走りが、頭にうかんだ。遠くで様子をうかがっている陸の姿が、目のはしにちらちら見える。

「で、でも、おれにはとても康介の代わりなんて出来ないよ。おれがそのチームに入っちゃったら、足ひっぱっちゃうもん」

走哉のあせた目が、あちこちに動いた。

「いや、⑤カクジツにおれの代わりってわけじゃなくて。駅伝まではまだ日があるから、おれの足も大丈夫だとは思ってるし。でも、もしダメなときは、代わりに出てもらうかもって感じで」

いつもハキハキものを言う康介にしては、まどろっこしい言い方をする。

「それってどういうこと？」

「あのだ。走哉、おれらのチームの補欠として、エントリーしてくれないかな」

「補欠？」

走哉の目が、一点で止まった。

あくる日の早朝、走哉は中央公園へのコースを変えた。住宅街をたて横にきれいに通る道を、一本南にずらした。

昨日、康介はこう言っていた。

「走哉、毎朝走ってるの？」

走哉はびつくりして、返答につまった。

「お母さんが、新聞取るときに見かけたって言ってたから。中央公園まで走ってるの？」

「まあ、いろいろ」

声がかすれた。

康介のうかが、ランニングコース沿いにあるとは知らなかった。

「走哉、走るの好きなんだ」

なんだか無性に居心地が悪くなってきた。

「補欠ならだれでもいいってわけじゃないからさ。走哉なら——」

康介が言い終わらないうちに、⑤口から言葉がすべり落ちた。

「わかった。補欠でエントリーしといて」

康介に走っているところを見られたくない。

それで今日は、道を一本ずらした。

中央公園までの道を走りながら、心の中のどろりとした気持ちちが、怒りだということに気付いた。

補欠なんて、バカにしやがって。

走りに集中できない。

おれ、出たかったんだ。優勝ねらえるようなチームじゃなくてもいいから、選手として出場して、走りたかったんだ。

家並みが涙でぼやけた。

もっとメンバー集めがんばれば、いっしょに走ってくれるやつがいたかも知れない。補欠でいいなんて、すぐに言ってしまったことが悔やまれた。

呼吸が乱れてきて、手足の動きもばらばらになった。走哉は倒れこむように、中央公園にかけこんだ。

学校に着くと、昇降口のところで、ふだんは走哉のことなど気にも⑥トめないヒロシが、なれなれしく腕を首にかけてきた。

「走哉、補欠になってくれたんだって。サンキュー。康介、足がどうのって言ってたけど、多分あいつ大丈夫だからさ」

「……………」

「自分で走らないで、金メダル、ゲットできるんだから、走哉ラッキーじゃん。あ、大樹。今日の放課後、練習できる？」

ヒロシは大樹の姿を見つけると、首から手をほどいて行ってしまった。

首もとがすすうした。⑦トウヒがざわざわする。

金メダルなんて、別にほしくねえし。

心の中でせいっぱい言い返した。

⑥教室に入っても、ランドセルを背負ったまま、つつ立っていた。

やっぱり、康介に断る。自分でメンバー探して、駅伝で走るんだ。

両こぶしに力をこめた。先生が教室に入ってくるのが見えて、あわてて席に向かった。

⑦朝はあんなに強く決心したのに、なかなか康介に切り出せずあせっているうちに、帰りの会が終わってしまった。ランドセルに手をかけたとき、逆に康介から声をかけられた。

「走哉、昨日は引き受けてくれてありがとう。今日中には、お母さんにチームエントリーしてもらおうから」

「あ……………」

気のぬけた返事に、康介が顔をのぞきこんできた。

「補欠、ひよつとしてイヤ？」

康介の目が、心配そうにゆれている。

「そ、そんなことないよ」

また口が勝手にすべった。

結局、断るチャンスを自分でつぶしてしまった。断るには、これが最後のチャンスだったかも知れないのに。

康介の気持ちも分かる。もし自分が万一出られなかったときに、みんなに迷惑かけたくないと思っただろう。でも、なんでおれなんだ。

帰り道、陸と⑧ジュンバンに小石をけりながら帰った。走哉のつけた小石が溝に落ちたとき、陸がぼそと口を開いた。

「走哉、駅伝のメンバー見つかったの？」

ずっとゲームの話をしていたのに、話がとぎれる瞬間を待っていたかのようにだった。

「いや。おれ、ヒロシたちのチームの補欠に入ることになったから」

「えっ！ ヒロシたちって優勝ねらってんでしょ。そのチームの補欠なら、それでもすごいかも知れないけど……。補欠って、しよせんは補欠じゃない。走らないことの方が、圧倒的に多いわけでしょ」

「……………」

そんなこと、言われなくても分かっている。

悪気はないのだろうけど、わざわざ口にする陸がにくたしくなる。

「そっか。補欠なんだ」

陸がくり返す。

「おれ、別にいいんだ。去年の駅伝大会も出てないし、いきなり二キロなんてキツそうだし」
「ふうん」

陸は長い前髪をふりはらうように、あごを空に向けた。

なんで、思ってもいないことは、すらすらと口から出るのに、本当に思っていることはちっとも言えないんだ。

⑧走哉はくちびるをかみしめた。

問1 — ㉞㉟について、カタカナを漢字に直しなさい。

問2 〓 A「おそれおいしい」、〓 B「上目づかい」、〓 C「無性に」について、本文中での意味として最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

A おそれおいしい

ア ありえない イ 恐ろしい ウ とんでもない エ 恥ずかしい オ みっともない

B 上目づかい

ア 相手を困らせようとする イ 相手に自分の好意をしめす ウ 相手の様子や機嫌をうかがう

エ 相手におわびの気持ちを伝える オ 相手に弱みを見せたくないと思う

C 無性に

ア さすがに イ さらに ウ つねに エ むだに オ やたらに

問3 — ①「あいまいに笑う」について、この時の走哉の気持ちを六十字程度で説明しなさい。

問4 — ②『出たい』とはつきり思うのが、怖いような気がした』について、なぜ走哉はこのように思ったのか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 出場すればどんな結果が出たとしても、それを受け入れなければならないから。
イ ヒロシと同じ大会に出るためには、まだまだ練習不足であると感じているから。
ウ 自分が声をかけても、だれも一緒に出てくれないだろうとあきらめているから。
エ 自分には走ることへの才能がないのではないかと、自信を失いつつあったから。
オ 大会に出ると言えば、父親がいろいろと関わってきて邪魔されると思ったから。

問5 — ③『あつ、走哉が出たいって』について、走哉はこの陸の言葉をどのように受け止めているか。五十字程度で説明しなさい。

問6 — ④「リレーのときのヒロシの完ぺきな走りが、頭にうかんだ」について、なぜヒロシの走りが「頭にうかんだ」のか。説明しなさい。

問7 — ⑤「口から言葉がすべり落ちた」について、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 急いで返事をしないと補欠は他の人になってしまうと思い、あせったから。
イ お世辞のようなことを、康介に最後まで言わせることが申し訳なかったから。
ウ 毎朝走っているのに補欠なのだと思われのが、恥ずかしかったから。
エ 駅伝のことをみんなに知られたくなかったので、早く話を打ち切りたかったから。
オ 補欠をたのまれるほど康介に高く評価されていることがわかり、うれしかったから。

問8 — ⑥「教室に入っても、ランドセルを背負ったまま、つつ立っていた」について、この時の走哉の気持ちを説明しなさい。

問9 — ⑧「走哉はくちびるをかみしめた」について、走哉はこの時どうして「くちびるをかみしめた」のか。説明しなさい。

問10 — ⑦「朝はあんなに強く決心したのに、なかなか康介に切り出せずあせっているうちに、帰りの会が終わってしまった」について、あなたの「決心したのになかなか切り出せなかった」時のことを教えて下さい。

(2018年度)

国語 解答用紙 その1

受験番号
氏名

1			2	3			4	5			6	7	8	9
ア	カ		A											
イ	キ		B											
ウ	ク		C											
エ	ケ													
オ	コ													

国語 解答用紙 その2

解答用紙

その
2

受験番号	
氏名	